

金沢大学でのパネルディスカッション

宮下孝晴*

テーマ：「壁画文化の未来」

会場：金沢大学 人間社会1号館 101 講義室

期日：2015.3.1 13:00～17:00

コーディネーター：宮下孝晴 金沢大学 人文学類教授 フレスコ壁画研究センター長

パネリスト(1) 建石 徹 文化庁文化財部 古墳壁画室 古墳壁画対策調査官

パネリスト(2) 高妻洋成 奈良文化財研究所 保存修復科学研究室長

パネリスト(3) 大杉栄嗣 大塚オーミ陶業株式会社 代表取締役社長

パネリスト(4) 矢口直道 金沢大学 人文学類 准教授



金沢大学人間社会研究域に設置されたフレスコ壁画研究センターは、イタリアの国立フィレンツェ修復研究所（Opificio delle Pietre Dure di Firenze）と組んだ2つの大きな共同プロジェクト、サンタ・クロッチェ教会大礼拝堂壁画の修復と、南イタリア（プーリア州）における中世洞窟教会壁画の診断調査を2014年度で完了した。これまで数々の国際貢献を果たしてきた当センターは所期の使命を終え、新年度からは同じ人間社会研究域に設置されている国際文化資源学研究中心に統合されて、新たな活動の道を切り拓くことになる。以上のような状況下にある2014年度末にあたり、当センターに蓄積された貴重な研究成果を広く地域において発信すべく、「イタリアの壁画を守る 日伊共同プロジェクトの成果」と題した「成果報告展」（2015.2.18～3.23）と本シンポジウムを金沢大学で開催した。

本学に設置されたフレスコ壁画研究センターの目的は、イタリアの壁画を最先端のデジタル機器を利用して調査・測定・記録することであったが、さらに視野を広げて、壁画文化の保存と活用という世界的に深刻な問題を、当初より文化庁古墳壁画室、奈良文化財研究所、東京文化財研究所、大塚国際美術館および大塚オーミ陶業株式会社などと連携協力して追求してきた。「壁画文化の未来」を考えると、壁画に対する（環境学を含めた）保存科学の深化、デジタル・アーカイブ分野の技術およ

びシステムの開発が急務であることは誰の目にも明らかで、できる限り多くの人の強い関心が「動かすことのできない壁画という絵画遺産」に向けられる必要がある。

シンポジウムでは、第1部の基調講演としてフレスコ壁画研究センターの活動と成果をセンター長である宮下が、第2部の基調報告として、壁画保存の未来研究への貢献として重要な「セラミック・アーカイブとデジタル・アーカイブ」についての概要説明が安藤明珠センター研究員からなされた。そして、第3部のパネルディスカッションは、高松塚やキトラ古墳壁画の保存・活用を担当している文化庁文化財部古墳壁画室調査官らをパネリストに迎え、歴史遺産、文化遺産としての「壁画」の保存・修復・活用の問題点について、第2部で報告のあった「セラミック・アーカイブとデジタル・アーカイブ」の最前線を踏まえ、会場に参加していただいた多くの市民の方々といっしょに考える好機であった。このパネリストの顔ぶれを見てご記憶にある方もいらっしゃると思うが、実は、このパネルディスカッションは、2012年1月29日に徳島県鳴門市の大塚国際美術館システィナホールで開催されたパネルディスカッション「デジタル・アーカイブとセラミック・アーカイブの可能性」の第2弾なのである。（あれから3年を経た今回の5人のうち、3人が再登場した。）とまれ、その時に議論された内容を本書に完全収録できたことは、この『最終版 研究調査報告書』刊行の意義の1つであると言えよう。

* 金沢大学名誉教授

(元)フレスコ壁画研究センター長

今回のシンポジウムで登壇していただいたパネリストの方々のプロフィールを簡単に紹介すれば、以下の通り。建石徹氏は文化庁文化財部古墳壁画室の古墳壁画対策調査官であり、日本の高松塚やキトラ古墳の壁画保存の問題でもっとも誠実に頭を悩めている1人である。奈良文化財研究所の高妻洋成氏は、保存修復科学研究室長として東日本の震災で瀕死の状態にある文化財レスキュー活動の指揮を執っている。大塚オーミ陶業株式会社代表取締役社長の肩書きで参加していただいた大杉栄嗣氏は大塚国際美術館創設時に大きな役割を果たした、高度な陶板レプリカ製作技術開発の代弁者である。ちなみに、今回の本学資料館で開催中の成果報告展には、高松塚古墳やキトラ古墳の壁画をほぼ完全に再現した陶板レプリカを出展してくださった。その背景には、大塚オーミ陶業株式会社の技術開発部門が本学フレスコ壁画研究センターと「3D スキャンデータと高精細デジタル写真データを利用した次世代型の陶板レプリカ製作」の共同研究で連携しているからである。本学の矢口直道准教授は、人文学部に所属してはいるものの、専門からすれば間違いなく工学部建築科の理工系代表であり、近年はインドのアジャンター石窟寺院を3D スキャナで調査・記録している。

さて、ここでは先に収録した大塚国際美術館スティーナホールで開催されたパネルディスカッションのように、録音テープを書き起こして活字にすることはしないが、パネルディスカッションを終えた今、コーディネーターとして「壁画保存の将来」について考えていることを以下にまとめてみることにする。

100 年以上の長いスパンで壁画保存を考えると、保存・修復の困難なレベルのものが今後はますます多くなってくるだろう。環境の悪化ばかりでなく、ピグメントの固着力や顔料の退色などの劣化が限界に近づいているからである。あるいは、突発的に壁画遺産を襲う自然災害には防災的にも、ほとんど対策の立てようがないものがほとんどである。

結果として、美術史的に有名であるとか貴重であるとか、保存修復のスポンサーがついたとかつかないとかという観点から保存対策を立てるのではなく、別の観点から網羅的な対策に取り組むほかはない。壁画を所有する国や地域の問題ではなく、できるなら、全世界的なスケールで取り組むべきであろう。

壁画遺産の保存対策にいかなる方法が採用されるにしろ、そのようなスケールと迅速さを重視すれば、低コストでスピーディなシステムでなければ意味がなく、まったく新しい発想を保存対策に導入しなければなるまい。それは、たとえて言うなら、壁画の DNA を採取して保存、さらにクローンを複製することである。DNA の採取とは、壁画に関するあらゆる計測・診断機器や高解像度撮影技術を駆使してのデジタルデータの集積であり、クローンの複製とは大塚オーミ陶業の印刷陶板を発展進化した次世代のセラミック・アーカイブにほかならない。さらに、この発想にトリアージュ（緊急度に応じた優先順位）の判断を加え、セラミック・アーカイブ化する壁画の優先順位を決定することも検討する必要がある。デジタルデータ測定、つまり DNA の採取だけは全壁画に実施することを最優先で義務化し、印刷陶板として復元する順番については、別の考慮条件を勘案して決定することが現実的な対策であると考ええる。

大塚国際美術館開館から 15 年以上が経過、印刷陶板技術の完成からは 20 年を経た今、技術的には新たな段階に入っているべきである。複製作業のあらゆる段階においてデジタルデータを可能な限り利用することで、ここ数年以内には複製の精度は高いレベルで客観化されるであろう。それでも、現段階では「ごく限られた特殊な再現」において名人肌の職人の介入を必要とするであろうが、現段階では、あくまでもそれを許容範囲内の介入とした上で新システムを量産体制に乗せる努力が期待される。

次の段階としては、いくつかの作例を実現させ、低コストと製作期間の短縮に関する客観的データを提示して証明すること。そして、新システムの完成と評価を、できるだけ早く壁画遺産の保存問題を抱える世界に発信すべきである。理想的にはユネスコにおいて、壁画保存の将来的保存法として、(オリジナル壁画の保存・修復プロジェクトはもちろんこれまでのように継続すべきだが、それとは別ルートで、つまりオリジナルを永久に保存できる保証は誰にもできないどころか、保証力は年々急速に低下するという前提に立って) 国際的コンセンサスが得られるような提案をしてほしいと思う。

同時に、このようなレベルでの「壁画レプリカ製作」を民間企業である大塚オーミ陶業の活動にとどめるべきか、あるいは将来的に国家的事業の一環として推進すべきかというような問題も生じてくるかもしれない。いずれにせよ、以下に述べる 3 つのポイントが大切である。1 つは大塚オーミ陶業内に専門的な技術教育セクションを設け、世界各国からの研修生を募集して高度な技術者を育成すること。2 つめは、壁画文化を自国の文化遺産として保存したいと望む国には、ユネスコなどの支援や指導を受けながら、セラミック・アーカイブを生産できるインプラントを（現地への指導者派遣も含めて）まるごと輸出する諸外国への支援セクションを設けること。第3には、陶板レプリカのクオリティ（精度）に関してインターナショナル・スタンダード（Otsuka-Omi）を確立し、大塚オーミ陶業製作というブランド名ではなく、客観的な審査（精度のチェック機構）を設けて、合格したものだけを世に送り出すことで、レプリカのレベルを一定以上に保持すること。ただし、当初は、大塚オーミ陶業の経験豊かな職人たちが最終仕上げ作業を行うことになるかもしれない。



地下プロムナードを利用した洞窟教会壁画の
原寸大展示を見学するパネリストたち



金沢大学資料館の外壁に掛けられた
成果報告展の垂れ幕



金沢大学資料館の地下プロムナードに原寸大で再現された
南伊の洞窟教会壁画



成果報告展の解説パネルを熱心に見学する学生たち
(金沢大学資料館)



成果報告展に出品された
精巧な陶板レプリカを見学する
学生たち (金沢大学資料館)



デジタル・アーカイブ・コーナー（金沢大学資料館）



シンポジウム
「イタリアの壁画遺産を守る」
（金沢大学人間社会1号館）



パネルディスカッション
「壁画文化の未来」
（金沢大学人間社会1号館）